

実践事例 1、3の学校の代表者による座談会

# 新学習指導要領下で目指すべき授業と学習評価を 実現するために必要な校内体制とは

実践事例1、3では、3校の新教育課程やグランドデザイン（以下、GD）、スクール・ポリシー（以下、SP）について、その編成・策定から校内での周知・浸透に至るまでのプロセスを振り返った。ここでは、3校の代表者が集まり、新学習指導要領の実施初年度である2022年度の授業と観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）の展望を語り合い、新学習指導要領の理念や自校の教育目標を実現するために必要な校内体制について考えた。

## 協働的な学びで、知識の習得 と思考力の育成を同時に図る

**河野** 本特集の企画を担当する、VIEWnext編集部の河野です。各校とも、自校の課題や新学習指導要領を踏まえて新教育課程を編成し、GDやSPを策定されています。その実行や実現に向けて、2022年度はどのような授業をしていこうとお考えですか。

**徳本** これまでの授業は、生徒が知識を習得し、それをそのままアウトプットできるようにする指導に力を入れる傾向があったと思

います。しかしこれからは、例えば漢字の習得でも、生徒がその成り立ちにまで考えを巡らせることができるように授業を設計すべきであり、そのために必要なのが、「主体的・対話的で深い学び」だと考えています。「なぜ、そうなるのか」を自ら考え、時に他者と対話しながら理解しようとする、また、考え、理解したことを論理的に、相手に分かりやすく説明できるようにすることを目指し、絶えず生徒に「なぜ」と問い続け、物事の本質を追究させたいと思っています。

**中上** 私が担当する化学において

も、協働的な学びが重要になると捉え、例えば授業では、教師の問いかけに対して相談したり、既習事項を自分の言葉で説明し合ったりするような、生徒同士が語り合う時間を頻繁に設けています。教師の説明を聞くだけでは、生徒は自分の理解が正しいか、確認することができません。他者に説明することで、自分の理解度を客観的に把握するとともに、新たな気づきを得るなどして、理解も深めます。

また、教科書に書かれているような確認実験に加え、探究的な実験も実施しています。それは、生

千葉県立千葉北高校  
進路指導主事  
**和泉雄介**  
プロフィールは、P.8

静岡県立静岡東高校  
教務主任  
なかうえ  
**中上明仁**  
プロフィールは、P.12



かんべあさひ  
広島県立神辺旭高校  
主幹教諭  
とくもと  
**徳本孝治**  
プロフィールは、P.16

VIEW next 編集部  
高校領域担当責任者  
こうの  
**河野仙一**

不断の改善で推進する 生徒主体の新教育課程

徒に仮説と計画を立てさせ、結果の考察も行わせる、学習内容と日常生活とのつながりを実感できるような実験です。そうした実験にグループで取り組むことで、思考力が磨かれると同時に、知識・技能が蓄積されていきます。時間の制約もありますが、今後、そのような探究的な実験を増やしたいと考えています。

**和泉** 私は、担当する英語の授業でSDGsに関する素材文を扱った際、大学教員を招き、生徒に向けた講義や生徒の発表への講評などを行ってもらったことがあります。専門家から直接指導を受けるのと、生徒は自信や達成感を得ます。本物に触れたり、仲間や周りの大人に認めてもらったりすることで、学習意欲は高まり、知識は一層定着して、思考が深まります。そのため、今後は大学や地域との連携がより重要になると考えています。

**河野** 知識・技能の習得と、思考力・判断力・表現力等の育成を両立させるということですね。

**徳本** 大学入試で思考力や表現力を評価すると言っても、試験に参

考書等を持ち込めない以上、一定以上の知識量が求められていると言えます。また、知識がなければ思考・判断も十分にできません。そうした意味で、知識・技能の習得の重要性はこれまでと変わらな いでしょう。一方で、思考力や判断力、表現力がなければ太刀打ちできない入試問題が増えているのも事実です。大学入試においても、知識の蓄積に加えて、論理的に思考し、表現する力を伸ばすことも大切であることを、どの教師も受け入れるべき時なのだと思います。

育成を目指す資質・能力を  
意識した振り返りが大切

**河野** 資質・能力を育成する授業を実践する中で、どのような学習評価を目指すべきでしょうか。

**和泉** 学習評価は、単に評定をつけるためだけでなく、生徒が自分の立ち位置を知り、自ら成長していくきっかけをつかむために行うべきです。本校では、「千葉北GD」(P.10参照)の策定時に併せて作成したルーブリックに、A

とCに加え、S評価を盛り込みました。例えば、文化祭でクラスの出し物を力を合わせて作り上げた経験を、他の学校行事に応用するなど、教師の想定以上の取り組みを「S評価」と捉えます。教科学習は、3段階評価ですが、A評価の中でも特に優れた取り組みについて、功績を認め、たたえるような仕組みをつくることで、自己肯定感や学習意欲を高め、さらなる成長を促したいと考えています。

**中上** 生徒の成長につながる学習評価であるべきという視点に同感です。私は、毎回の実験レポートで、実験結果の考察に加えて、「疑問に思ったこと」「実生活との関連」についての自分の考えを書かせています。新たな疑問がないか、さらに、実生活との関連はどのようなものかを考えさせることで、生徒をより主体的に課題に向き合わせ、知識を活用する思考力を育成したいという意図があります。

**和泉** どの教師も、SPの策定などで22年度を迎えるための議論を経て、生徒に身につけてほしい資質・能力のイメージを持っている

と思います。その資質・能力を、生徒がよく目にする黒板やワークシートなどに明示し、生徒が絶えず評価の観点を意識できるようにするのはどうでしょうか。これまでの授業や教材を大きく変えなくても、少しの工夫で授業や学習評価の質が向上すると思います。

**徳本** 私は、担当する国語の授業で、「定義が説明できること」「主題を一言で言えること」「対比できること」「根拠を述べられること」「具体と抽象を使った例示ができること」の5つの点を重視しています。そして、定期考査では、必ずそれらの点を評価する問題を出しています。知識がなければ定義の説明はできませんし、対比や例示ができていないかを見ることで、思考力や表現力を測ることもできます。学習評価で求められる3観点の評価をする上でも効果的だと考えています。

教師が自由に意見を言える  
風通しのよい環境を

**河野** 授業等が始まり、「教科書

を終わらせないといけない」といった問題に直面すると、新学習指導要領の理念や自校の教育目標から離れた授業になってしまつのではないかといった声を現場の先生方から伺います。そうした状況にしないためには、どのようなことに留意すべきでしょうか。

**徳本** 大切な点が2つあると思います。1つは、「大変だったけれども、やってよかった」と実感できるよう、先生方に実際に取り組んでもらうことです。もう1つは、教科会や主任会で先生方が発言しやすい環境をつくり、各自の実践やその成果を語り合うことです。

本校ではこの2年間、教科間の互見授業に力を入れてきました。授業内容や使用教材だけでなく、その授業でどのような資質・能力を育成するのか、そのための工夫は何かといったことに焦点をあてて指導案を作成し、授業を見合いました（P.19参照）。授業ノウハウの共有に加え、育成を目指す資質・能力についても教師間で目線合わせができ、活発に意見を述べ合う雰囲気が醸成されたと思います。

**和泉** 私も、先生方一人ひとりが当事者意識を持ち、学校の方向性に対する目線を合わせるが大切だと思います。そのために、「総合的な探究の時間」（以下、「総合探究」）が重要な役割を果たすと考えています。「総合探究」は、「学びに向かう力、人間性等」を含め、教科学習よりも幅広い資質・能力を育成しやすい場です。本校では総探推進委員会を中心に、3年間を見通し、育てたい生徒像と学校教育目標をリンクさせて、実施内容を抜本的に見直しました。その過程で、本校が目指すべき方向性について教師間で意見交換をする機会が増え、それがSP策定における活発な議論にもつながったと感じています。全校体制で「総合探究」に取り組めば、自校の教育目標を共有する基盤をつくりやすいことを実感しました。

**中上** 本校では8年ほど前、約20人の若手教師による「アクティブラーニング（以下、AL）推進委員会」を立ち上げて授業研究を行ってきました。委員は学期に1回以上、ALの視点を取り入れた

授業を実践し、その他の教師は少なくとも年3回、授業を参観し、授業者に気づいたことをフィードバックしました。そうした取り組みを通して、教科の枠を超えて授業ノウハウを共有し、教師間で意見を述べ合う文化が育まれました。コロナ禍の影響もあり、委員会の活動は休止していますが、今も先生方は自主的に授業を見合っている、授業改善に取り組んでいます。

**和泉** 客観的な指標に基づいて授業改善に取り組める組織体制も大切だと思います。「こういう生徒が多い」などと、「印象」で議論するのではなく、データに基づいて

て、そうした生徒の増減やその原因を分析し、授業の何を改善すべきかを判断する。例えば、ルーブリックや外部指標を基に、「この項目で3ポイント以上変化があったものは、要改善項目」と決めれば、おのずと授業改善が進みます。意見を述べやすい雰囲気とエビデンスベースで判断する文化が、課題が表出した際に柔軟に変化し、対応していける教師集団をつくるのではないのでしょうか。

**河野** 新学習指導要領の実施に向けて、全国の先生方の背中を押すような示唆に富んだお話を、ありがとうございました。

## 今年度の本誌の特集では、 新学習指導要領に基づく教育実践を 定期的に取り上げていきます。

今号に登場した3校に引き続き協力いただき、8月号では3校の「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業実践を、2月号では3校の学習評価の実践を取り上げる予定です。「不断の改善で生徒主体の新教育課程を推進する」軌跡を、各校の実践にお役立てください。